

#### 14. 骨シンチグラムで多発性に骨外異所集積を呈した急性骨髄性白血病の一例

政井 章 太田 幸雄 星 宏治  
木村 和衛 (福島医大・放)  
宗像 志朗 藤田 悠治 佐藤 善二  
佐々木幹人 (太田西ノ内病院・放)

骨シンチグラムで、骨外多臓器(肺, 肝, 胃)にびまん性異所集積を呈したAMLの一例を経験したので、組織学的所見と若干の考察を加えて報告する。

本症例の骨外異所集積の原因は、高Ca血症であり、組織学的metastatic calcificationの程度と骨外異所集積の程度に、相関はみられなかった。

骨シンチグラムの骨外異所集積は、組織学的metastatic calcificationが出現するより前の時期に認めうる現象であり、metastatic calcificationは、Ca代謝異常の終焉像であると推察された。

#### 15. Adrenogenital syndrome の副腎シンチグラム所見の検討

山崎 哲郎 丸岡 伸 高瀬 圭  
木下 俊文 三井 英明 坂本 澄彦  
(東北大・放)  
中村 護 (国立仙台病院・放)

副腎性器症候群の疑いで当院を受診した女性5名に対して行った副腎シンチグラムの所見に検討を加えた。先天性酵素欠損による副腎性器症候群の3例では、いずれも両側副腎のuptakeの亢進が認められた。Androgen産生副腎腫瘍の2例はいずれも組織学的に悪性と考えられ、シンチグラムでは腫瘍は正常副腎と同程度以上のuptakeを呈した。副腎性器症候群の原因による分類に副腎シンチグラムは一助となったと考えられた。

#### 16. 分化型甲状腺癌の<sup>131</sup>I治療症例における<sup>131</sup>I tracer dose scan と therapeutic dose scan の比較

三井 英明 丸岡 伸 山崎 哲郎  
高瀬 圭 木下 俊文 坂本 澄彦  
(東北大・放)  
中村 護 (国立仙台病院・放)

1971年2月～1991年10月の過去20年間に当院で<sup>131</sup>I大量内用療法を行った106例中、頸部以外の遠隔転移を認めた45例につき診断量(74～111 MBq)と治療量(3.7～5.55 GBq)の全身スキャンで転移病巣検出力を比較し、治療量でのスキャンの診断的有用性をTSH, サイログロブリン値と併せて検討した。1人あたりの<sup>131</sup>I治療回数は1～14回(平均3.4回)平均総投与量は14.32 GBqであった。治療量にて初めて転移が描出されるか、より明確になる場合が28例(62%)あり、診断的有用性が認められた。若年例、肺転移例、投与後早期の外部線量率が高いうちにスキャンした例で描出がよい傾向があると思われた。

#### 17. 骨シンチが有用であった内分泌疾患の2例

星 宏治 木村 和衛 (福島医大・放)  
藤田 徹夫 (同・核)  
佐藤 善二 藤田 悠治 宗像 志朗  
(太田西ノ内病院・放)

骨シンチが原疾患発見の糸口となり、有用であった内分泌疾患の2例を報告した。

1例目は、31歳・女性で右股関節痛を主訴として骨シンチを行い、頭蓋骨、右恥骨と肋骨への強度の多発性集積とその他の骨への軽度集積像から、骨折を伴った骨粗鬆症で、年齢も考慮し内分泌疾患による骨変化と診断した。その後、左副腎原発のCushing症候群(手術の結果、腺腫)と判明した。

2例目は、56歳・女性で左股関節痛と腰痛を主訴として骨シンチを行い、beautiful bone scanの集積状態から、原発性副甲状腺機能亢進症による骨変化を疑ったが、その後、左副甲状腺に腫瘍が発見され、原発性副甲状腺機能亢進症(手術の結果、腺腫)と判明した。